
お好み焼き

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お好み焼き

【Zコード】

Z8418F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大阪のお好み焼き屋の娘桜と広島のお好み焼き屋の娘菜月。どちらも自分のお好み焼きこそが最高だと言つて引かない。それで先生の提案で勝負となるが、お好み焼きはどちらも美味しいです。

第一章

お好み焼き

今一年四組では非常に厄介な問題が起きていた。簡単に言えば内戦が起きていたのだ。しかもそれは非常に深刻なものであった。

「あんた味音痴や」

「その台詞そつくりそのままあんたに返したるけえ」

クラスの中で大阪弁と広島弁で喧嘩が行われている。かなり柄が悪く聞こえる。

見ればクラスの中央で一人の女の子が言い争っている。一人は黒いやけに長いポニー・テールでアーモンド型の釣り目が特徴である。唇が結構小さく尖った感じだ。スカートはかなり短くしていてそれが見事な脚を露わにさせてている。

対するのは黒髪のツインテールの女の子だ。幼く可愛らしい顔立ちだがどういうわけか制服のスカートを目の前にいるポニー・テールに対抗するように短くしている。「ちらもかなり見事な脚だ。

「うちはな。通やで」

「うちもじや」

大阪弁はこの一人からのものだつた。それぞれ口を尖らせて言い合っている。ポニー・テールが大阪弁でツインテールが広島弁だつた。

「うちの家は代々お好み焼き屋なんや」

「それはうちもじやけえな」

「だから言つんや」

「うちもじや」

顔をすり合わさんばかりに近寄せ合つ。その「うえどせり」と言ひ合うのである。

「お好み焼きいうたら大阪や」

「広島じや」

何かと思えばお好み焼きの話である。とにかくどちらも引かない。

そのまま言い合い今にも取つ組み合いになりかねない有様だ。皆そんな二人を見て呆れ果て止めようとするがそれが二人の剣幕の才一ラにより中々できないでいた。

「お好み焼きのあの厚さには誰も勝てん」
「広島のな。あのキヤベツの使い方じや」

こう言い合いやはり互いに引かない。

「それがわからん奴はアホや」

「あかんたれじゃけえな」

「言うたな」

「そつちこそ」

ここで雰囲気がさらに険悪なものになるまさに一触即発であった。
「ほな。一回ケリつけるか？」

「望むところじゃけえ」

本当に取つ組み合いになりそうなので今度こそ皆が止めようとする。しかしそれよりも前にそれを止める人がやつて来たのであった。

「こら、御前等」

「あつ、ゴリラブタ」

「そういうや次の授業ゴリラブタの物理だつたつけ」

「誰がゴリラブタだ」

やたらと大きく太つていてしかもいかつい顔で尚且つ五分刈りという到底学校の先生には思えないのが教室にいた。その大きさは上も横も普通の生徒の倍はあった。

その先生が一人の間に来る。そしてそれぞれの名を呼ぶのだった。

「赤坂桜」

「ゴリラブタかいな」

ポニー・テールが応える。

「青柳菜月」

「余計な仲裁は無用じゃけえ」

今度はツインテールだった。

「まずは言つておく」

「リラブタと呼ばれたその先生は闘争心をそのままにさせている二人に対して告げる。

「もう授業がはじまるぞ」

「何や、もうそんな時間かいな」

「相変わらず時間ちゅうのは進むのが早いのう」

「そう言わても動じるところのない一人であつた。反省している様子は当然ない。

「ほな。ちゃんと席に着いつかいな」

「その前に言つておく」

「何や?」

「何じや?」

桜も菜月も先生の言葉に顔を向ける。そのタイミングは同時だつた。

「御前等、今日の昼休み職員室に来い」

「ああ、お好み焼き御馳走して欲しいんやな」

「そつじやつたら遠慮したらいけんで」

「御前等、わかつてるのか!?」

「一人があまりにも反省している様子がないので呆れる先生だつた。

「全く。職員室といつたらな」

「何があるんかいな」

「うち知らんで」

「説教に決まつているだろうが。全く御前等ときたら」

「その赤ら顔をさらに赤くさせての言葉だつた。

「いつもいつも。何でこう仲が悪いんだ」

「こいつがお好み焼きは広島が正統言づからや」

「大阪のやつじやなきやいけんて言つけえの」

「そんなん絶対許せんや」

「あんなんいつこもあくか」

とにかくそれ引くことを知らない一人であつた。

「何が広島やねん。変な焼き方覚えてからに

「あれの何処がお好み焼きなんじや」

また言い合つた。

「お好み焼きはな。とにかく大阪のやつこそがほんまもんで」

「広島はお好み焼きの発祥じゃけえ。」うちが正しこじや」⁶

「ああ、もういい加減にしろ」

遂に先生も完全に切れてしまつた。

「もう職員室に来なくともいいだ」

「そうでつか」

「それやつたら行かんけえ」

「久々に切れた」

見れば本当に顔を真つ赤にさせている。どう見てもその仇名の「アリラブタである。名付けた人間はよく見ていると言ひべきであらうか。

「こうなつたら御前等で決着をつける」

「ケリつける?」

「腕つぶしけえ」

菜月はこれまたやけに物騒なことを言い出してきた。

「それやつたら毎日正統なお好み焼きで鍛え上げて栄養もつけてる

うちの思つ壺じや

「何言うとるんや、アホか」

桜も負けていない。というよりは嫌になるほど丑角であった。

「うちは赤ん坊の頃からへらを持つてたんや」

「こう言うのである。

「それで来る日も来る日もお好み焼きを焼いとるんや

「うちもじや」

「うちはちやうで。何時間も焼いてな」

本当に見事なまでのお好み焼き馬鹿である。しかもこれが桜だけではなく菜月までそうだというのだから実に始末の悪い話であった。

「それで何でも入れられて栄養たっぷりのお好み焼き食べてな。最強になつたんや」

「最強はうちじゅう」

話が完全に堂々巡りの水掛け論になつてきいていた。

「うちの広島こそが最強なんじゅうけえ。嘘つくなや」

「大阪は無敵や」

桜は今度は無敵だと言い出した。

「無敵の大坂。味合わせたるで」

「やるか?」

「やらいでか?」

「だからだ。お好み焼きで勝負をつける」

いい加減うんざりとした調子での先生の怒りの言葉だった。

「わかつたな。お好み焼きでだ」

「あつ、それでつか」

「それで勝負つけりやええんじゅうな」

「そうだ。当たり前だろうが」

怒りを十一分に含んだ言葉であった。

「お好み焼きでいつも喧嘩しているんならそれで決着をつけろ」

「そりだよな」

「ああ、全くだ」

それまで二人のあまりもの破天荒さの前に見ていることしかでき
ないでいたクラスの皆は先生のその言葉に完全に同意して頷くのだ
った。

「お好み焼きで言い合つてるんだからやつぱりな」

「それだよな。決着を着けるんならな」

「そりだよな」

「わかつたな」

先生はあらためて一人に対して問うた。

「それでな。いいな」

「うちが絶対に勝つしな」

「うちが負けるけえ」

一人はこう言われても相変わらずの調子だったがそれでもだつた。

第一章

「ええで」「受けて立つ」毅然としたそれぞれの言葉だった。
「それで大阪の素晴らしさを味合わせたるわ」「広島は負けんけえの」「それを気が済むまでやれ」先生はまた一人に対して言った。
「それでわかつたな」「わかりました。そやつたら」「やる時は」「ああ、それだな」実はまだそこまでは考へていなかつた先生だつた。話を振られてあらためて考へる顔になり暫く時間を置いてから一人に答えるのだった。
「そうだな。それで御前等」「はい」「二人は同時に先生に答えてきた。
「何時でもいいんだな」「うちの腕は何時でも万全でつせ」「伊達に毎日やってるわけじゃないんじやけえの」「こうしそれ返事を返してきた。
「そやから何やつたら今すぐにでも」「やつたるけえな」「そこまで言つのならだ。まず道具を揃えて「家から持つて来ますで」「うちもじや」「一人はこれについてはすぐに答えてきた。

「もうそれやつたら屋台もあるむかこ」

「ひとつちも屋台も」

「随分用意がいいな」

先生もこの手際のよさには感心はする。

「それに食材かて」

「どれだけもあるんじやんけえの」

「これもであつた」

「すぐにでもできますで」

「もう今にでも。家帰つて」

「まあ待て」

流石にそれは止める先生だった。

「今はいい」

「ええんでつか」

「じゃあ何時なんですか?」

「今度の日曜だ」

時間は先生が指定するのだった。これは教師の権限でいささか強権的だつたがそうでもしないとこの一人は従わないのがわかつていたからだ。

「今度の日曜。いいな」

「ええ。何時でも」

「一言はありませんけえの」

一人もそれで異存はないようであつた。先生はそれを確かめてからまた言う。

「その間に宣伝をしとくか

「宣伝!?」

「そうだ。今のところ知つてるのはこのクラスだけだな
声をあげたクラスの面々に対してもう答えた言葉だつた。

「だからだ。他のクラスや学年にも勝負のことを知らせてだな
全校を巻き込むんですか
無差別テロみたいですね」

「その通りだ・・・・・つてこり」

生徒達の言葉に頷きかけたところで止まる先生だった。

「人聞きの悪いことを言つた。俺は北朝鮮の工作員か」「違うんですか?」だつて

「この連中の騒動に巻き込むつてやつぱり」

「この騒動を終わらせる為だ」 8

先生の主張ではこうであった。

「その為にだ。皆に確かめてもらつんだよ」

「皆ですか」

「そうだ。全校でこの一人のお好み焼きを食べでもらう

先生が言つのはそういうことだつた。

「それでな。どっちが美味しいかアンケートを取つてな

「それで白黒つけるつてわけですか

「どうだ?」

「ここまで話したうえで皆に尋ねた。

「いい考えだる。これなら話がすぐに終わるぞ」

「何か今日の先生汚てるよな

「確変つてやつか?」

生徒達は先生の考えを聞いてもこれまでと態度を変えず「こいつ言
うのであつた。

「こつもはマジでコリラブタなのによ」

「こりゃ明日台風と地震がいつぺんに来るな

「・・・・・あのな、御前等」

言われっぱなしの先生も流石に腹に据えかねて彼等に言つてきた。

「俺を何だと思ってるんだ?」

「ですから先生だつて」

「そう思つてゐんですけれど?」

「嘘つけ、嘘を」

少なくとも普段からボロクソに言つてくれてゐることはわかる先
生だった。そうでなくてはここまで言つ筈がないからである。これ

だけはわかった。

「まあいい。それでだ

「ええ

「これでいいな？」

あらためて彼等に問うのであった。

「食つてそのうえでだ」「どっちが上か確かめてもらつんですね」「そういうことだ。ただし金は払えよ」「えつ、審査するのに金かかるんですか?」「それつて何か」「心配あらへん」

「そこんとこりは勉強しておくれんのお」「桜と菜円がここに嫌な顔をするクラスメイト達に 대해서言つたのであつた。

「一枚五畳のとこを四畳」「それでどうじゅ」「まあその位ならいいか」「やうだな」「じゃあ俺達はそれでな」「楽しく食べさせてもらつぜ」「わかつたら学校中に宣伝するからな」「先生がまた皆に對して言つた。」「それでいいな」「ええ。先生が奢ってくれるんなら最高だつたんですけどね」「それはないですか」「俺を破産させる気が」

むつとした顔になつて言い返す先生だった。また随分とノリがいいよつである。

「御前等全員にそんなことできるか。自分の金で好きなだけ食え」

「まあそういうことで」

「今度の日曜だな」

「負けへんで」

「それはこっちの台詞じゃ」

皆が早速お好み焼きを楽しみにしていようと櫻と菜円はまた睨み合うのであった。

「大阪の味に勝てるのはあらへんからな」

「広島は至高じゃ。思い知らせたるけえのあ」

こう言い合いそれぞれ勝利を誓い睨み合うのだった。そして時間は瞬く間に過ぎその日曜日になった。学校の中庭に並んで二軒の屋台が並んでいる。それぞれ桜と菜円が中にいて鉄板の上に油をひきそこで早速両手に持つているへラを使ってお好み焼きを焼いていた。まず桜のそれは大阪風だった。分厚く焼かれておりその中にキヤベツや豚肉や具が入っている。やはり彼女はそれであった。

対する菜円のそれは当然ながら広島風である。一枚の薄い生地の間にキヤベツやモヤシや具が入っている。いかにも当然と言えば当然であった。

「さあ、いよいよだな」

「そうだな」

皆その一枚ずつ的確に、だが手早く焼かれていくそのお好み焼きを見つつ屋台の前に集まっていた。もうソースや青海苔、鰹節の匂いが辺りに満ちている。当然マヨネーズもある。

「どつちが美味そうだ?」

「俺は大阪かな」

「私は広島ね」

二人の屋台を覗きながら皆それ言ひ。

「やつぱりな。どつちかっていつも」

「そちらかしら」

「けれどどちらにしろな」

「ああ。食べたいよな」

「もうすぐよね」

やはりまずはそれだつた。そのソースの暴力的な香りの前に皆暴動寸前だつた。とにかく今まさに戦いがはじまるうとしているのであつた。

「さてと、いよいよか」

そのゴリラブタと呼ばれている先生が屋台の前に皆が集まっているのを見て楽しそうに言つ。

「そろそろはじまるな。じゃあ俺も」

「おや、袴田先生」

ここで温厚な顔の老人に声をかけられるのだつた。

「貴方も参加されるのですね」

「あつ、校長」

その老人はこの学校の校長先生だつた。生徒からも教師からもその温厚な人柄で評判の人物である。当然PTAからも人気が高い。所謂いい先生である。

「先生も」

「ええ、まあ」

ちらりと屋台の方を見つつ校長先生に答える先生だつた。

「言いだしつペですしね、私が」

「いい案だと思いますよ」

校長先生はその温厚な笑みで先生に對して述べた。

「やはり。食べ物の言い争いはその食べ物で解決するのは一番ですから」

「だからですか」

「はい。それにです」

見れば校長先生にしろその視線はじつと一つの屋台の方に向けられている。そこから離れるところがないのがみそであつた。

「私も。楽しみにしています」

「校長もですか」

「実は。お好み焼きが大好きでして」

温和でかつにこやかな笑みを浮かべて述べる校長先生であった。

「私もまた」

「左様ですか。ではどちらを?」

「それは断定できません」

「今度はそれぞれの屋台を見ての言葉であった。

「それに関しましては、実際に食べてみないと」

「そういうことですか。それでは」

「はい」 8

早速一步前に出る校長先生であった。

「少し。確かめています」

「そうですね。では私も」

この先生もまた校長先生に続いて屋台に向かつ。屋台の前に来る
ともう行列になっていた。そこに並ぼうとする早速生徒達が彼を
見て言つのであった。

「げつ、ゴリラブタじゃねえか」

「何しに来たんだよ」

「まさか食いに来たのかよ」

「また太るぜ、あいつ」

「聞こえてるぞ、こいら」

いつもの如く無茶苦茶言われたので言葉を怒らせる先生であった。

「俺が太ろうがどうなるうが勝手だらうが。違うか?」

「けれど先生つて糖尿ですよね」

「あれ、痛風じゃなかつたか?」

「俺高血圧つて聞いたぜ」

どれにしろ聞きたくもない不吉な名前の病気ばかりであった。確
かに大人になればこういった病気のことが気になったりするものだ。
しかし彼等の言葉はこれまた實に無遠慮でありしかも先生の神経を
逆撫であるのに充分過ぎる程のものであったのであった。

そして先生はそれを聞いて、やはりいつものように言つのであつ
た。最早この学校ではお約束ともなつてゐる話の流れであった。

「どれにもなつとらんわ」

「あれつ、そなんですか」

「成人病じやないんですか」

「そこには氣をつけているわ」

これは本当のことである。太つてはいるから余計にであつた。

「かみさんと言われてな。ちゃんとしているぞ」

「げつ、先生結婚していたんですか！？」

「嘘でしょ、それ」

「嘘言つと閻魔様に舌を抜かれますよ」

「・・・・・ あのなあ」

生徒達のあまりにも酷い言葉に流石に閉口しつつも嘘つのであつた。

「俺だつて結婚位してるわ
「そうなんですか」
「そうだ。とにかくだ
先生は言つのだつた。
「俺もお好み焼きを食うからな
「あいよ、また一枚予約やな
「了解じゃけえ」

遠くからそれぞれ桜と菜月の言葉が返つてきた。行列の向こうを見てみると二人はそれぞれ凄まじい勢いでお好み焼きを焼きそこにソースやマヨネーズや海苔やかつおぶしを電光石火でかけていた。それは最早神の領域に達している見事な動きであつた。

先生はその二人を見て。ぽつりと呟くのだった。

「もう少し時間がかかりそうだな
「いえ、すぐですよ
「そうです、すぐなんですよこれが
「すぐなのか」

言われてみればそうだつた。列の動きを見てみるとかなり速い。少なくとも先生が最初に思つていたよりも三倍は速いものであつた。

「確かにそうかもな
「あの一人手が早いからすぐなんですよ
「そうそう。それで先生
生徒達はまた先生に尋ねてきた。
「どつちにするんですか?」
「大阪ですか?広島ですか?
「両方食つてみる」
それが先生の考へであつた。
「そうじやないと両方の味がわからないからな

「実は俺達もそうなんですよ」

「ですからお金は倍かかつてますけれどね」

「やっぱりそうか」

「まあそれでもこの匂いを前にすれば

「そうそう」

ソースのその香りをかいでそれだけで恍惚として倒れそうにすらなる生徒達であった。ソースのその暴力的な香りの前にノックアウトされようとしているのだ。

「それだけ出しても

「惜しくはないですよ

「そうだな。確かにな

「その通りですね。では袴田先生」

「あつ、はい」

ここでそれまで前にいた校長先生の言葉に応える。校長先生も先生もちゃんと並んで待っていたのだ。この辺りのこととはちゃんとわきまえているのであった。

「そろそろですよ

「そうですか。速いですね

「早い安い旨い

こういった店での決まりの売り言葉であった。

「実にいいことではあつませんか

「確かに」

先生も納得する正論であった。まさにその通りである。だからこそ牛丼が人気の食べ物でありそれができる店は人気になる。まさにその通りであった。

「それでは。私も両方を

「校長もですか」

「恥ずかしながらこの歳でも底なしでして」

おおらかに笑いながらの言葉であった。

「それでは。頂きます

「そうですね。では私も」

「あいよ、校長先生」

「ゴリラブタ、できたけえのう」

「ここまで来てゴリラブタとか言つなかつ」

客として来たのにそう言われてまたしても怒る先生だった。

「大体俺は袴田だ。ゴリラブタじゃないぞ」

「それはええから早く列から出るんじや」

「そやそや。皆列になつてゐるからな。はよ出るんや」

桜にまで言られて忌々しさを感じながらもそれでも外に出る。そうして学校の中庭のベンチに座つてそのお好み焼きを食べはじめる。横には校長先生がいて見事に大小になつっていた。

「それではいよいよですね」

「はい」

既に箸を手に取つてゐる。後は食べるだけであつた。

実際に紙の皿の上に置かれたそれを小さく切つて箸に取つて口の中に入れる。まずソースにマヨネーズ、青海苔にかつおぶしの香りが口の中を支配する。そして次にお好み焼き 자체の味が。先生が最初に食べたのは桜の大坂の方であつた。その味はどういと。

「おや」

「ほほう」

先生だけでなく校長先生も声をあげたのであつた。楽しむ声であった。

「これはまた」

「美味しいですね」

「はい。確かに」

校長先生は満面の笑顔で先生に述べるのだった。

「流石に。言つだけはありますね」

「こちらもです」

先生もまた言つ。なお先生はまずは桜の大坂風を食べ校長先生は菜月の広島風だ。だがそれでもそれぞれ美味しいと言つたのである。

「これだけのお好み焼きとは

「思いませんでしたね」

「これは赤坂の勝ちでしょうか」

先生はまず桜の方が勝つたと思った。彼女のお好み焼きを食べたうえで。

「これ程までとは

「いえいえ、私はですね」

しかし校長先生は校長先生でまた違うことを言つのであった。

「青柳さんだと思いますよ」

「広島ですか」

「このお好み焼きは最高です」

それが校長先生の主張の根拠であった。

「ですから。これは

「いや、待つて下さい」

だがここで先生は言つのであった。

「赤坂のこの大阪風もですね」

「よいのですか」

「是非食べてみて下さい」

校長先生もその膝の上に桜の大坂風お好み焼きを置いている。だからこそ勧めるのであった。

「そうすればわかりますから」

「では袴田先生もですね」

「私もですか」

「そう。先生もですよ」

校長先生はその温和な顔で先生に話した。

「青柳さんの広島風を召し上がるはどうでしょうか」

「青柳のですか」

「さあ、どうぞ」

先生の膝の上にもまた菜月の広島風お好み焼きがある。校長先生と全く同じ状況だ。先程一人で同時に買ったものだ。だからこそ校

長先生もまた言つのであつた。

「そのお好み焼きを。是非」

「わかりました」

そして先生は校長先生のその言葉に頷くのであつた。

「それでは。是非」

「まずは召し上がりですね」

校長先生はまた述べた。

第五章

「それからですね。最終的な判断は」「そうですね。ではこちらも」「はい。食べましょう」「こうして校長先生も先生ももう一方のお好み焼きもまた食べるのであった。そしてその結果出す判定とは。これしかないのであった。「これはまた」「これはまた」「そうですね」「そうですね」一人で言い合つ。それそれのお好み焼きを口の中に入れたまま。「どちらがどちらとは」「言えませんね」「言えませんね」「はい」「これが二人の先生の結論であった。
「これはまたあまりにもレベルが高いので」「確かに」先生は校長先生の今の言葉に頷いた。
「どちらがどちらとは」「言えませんね」「さて。私達はそうですが」「いい」あらためて言う校長先生であった。
「生徒達はどうでしょうか」「それは人それぞれですが」「こう言つて即答は避ける先生だった。「ですが」「ですが?」「舌は正直です」「これがこの先生の考え方であった。
「決して嘘はつきません」

「そうですね。人間言葉では嘘はつけでも」

「舌で嘘はつけません」

校長先生に対しても述べた。

「それは決して」

「それでは。中々面白い結果が出そうですね」

「ええ。さて」

ここにどちらのお好み焼きも奇麗に食べ終える先生だった。見れば校長先生もどちらも美味しそうに食べ続けている。
そしてまた先生に対して言うのであった。

「最近、食が細くなつたのですが」

「そうだつたのですか」

「歳でしてね」

一瞬だが苦笑いも浮かべる校長先生だった。

「どうしても捕捉なつていきました」

「そうでしたか」

「ですが。今は」

次にそれまでの言葉を打ち消してみせた。そのうえでまた言葉を続ける。

「このままだとどちらも食べられますね」

「どちらもですか」

「そうです。どちらもです」

体格に恵まれていてる先生はともかくとして細く小柄な校長先生の食べる勢いもまたいいものだった。それを見ていると校長先生もまたどちらのお好み焼きもまた気に入っているのがわかる。

そして瞬く間に。校長先生もまたお好み焼きを二枚共食べ終えるのであった。そのうえで満足しきつた声でこう述べるのであった。

「御馳走様です」

「食べ終えられましたね」

「これが私の答えです」

「それがですか」

「はい、そうです」

また満ち足りた声で答える校長先生であった。

「さて。後は」

「判定ですか」

「本当にどうなるか楽しみです」

また言つ校長先生であつた。

「どういった判定になるのか

「そうですね。それでは」

「はい。私達もまた」

こうして先生達も判定を下すのであつた。程無くどちらのお好み焼きも売り切れ判定となつた。その結果はといふと。

「何やて！？」

「こうなるんけ」

驚いているのは桜と菜月だけだつた。二人はそれぞれの屋台から驚いた声で叫ぶ。だがそくなつてしているのはその二人だけであつた。

「同じつて何やねん」

「うちの方が上ちゃうんか

「だつてなあ

「実際なあ」

しかし皆はその二人に対してもう一つの声であった。実際に食べた面々の言葉である。

「味は互角だつたぜ」

「完全にな」

「互角！？」

「何でじや

一人だけが信じない。お互い顔を見合わせるがそれでもだつた。

「大阪の方が上の筈や」

「広島ダントツじゃけえ。嘘じやなく」

「いや、互角だつたぞ」

「その通りですよ」

「げつ、『ゴリラブタ』に

「校長先生まで」

先生はともかく校長先生まで出て来たのは一人にとつては驚きだつた。流石にまた『ゴリラブタ』と呼ばれた先生は不満そうであつたが。「食つてみてわかつたんだ」

先生は『ゴリラブタ』と呼ばれて不機嫌になつた顔で述べた。
「御前等の腕もいいしあ好み焼きの味も互角だつた」

「うち等の腕の問題やないんか」

「そうじやつたらやつぱり広島が」

「いえ、袴田先生の仰る通りです」

「袴田先生つて？」

「だからゴリラブタのことじやねえのか？」

実は先生の名前は殆どの人間が見事に忘れてしまつていた。その仇名ばかりが有名になつてしまつてゐるのであつた。先生にとつては災難なことに。

「それつてよ」

「ああ、そういうやうか」

「そういう名前だつたな、そういうえば」

「全く。俺の名前のこととはまあいい」

本当はよくないはないのだがとりあえずはそれは置いておく先生
だつた。

「とにかくだ。大阪も広島もなかつた」

「ないんか！？」

「そんな訳は」

「だから聞け」

全く納得しようとしない桜と葉月に対しても言つ先生だつた。

「確かに美味かつた」
「それは確かに」
「マジで美味かつたな」
皆もそれは認める。先生の言つ通りだつた。
「どちらもな。しかしだ」
先生はさらに言つのだつた。
「どちらがよりよいとは優劣はつけられなかつた」
「だからそれは嘘や、大阪こそが」
「広島はお好み焼き発祥じやけえ。それで何で」
「だからだ。御前等の腕は互角だつた」
先生が言つのはそこだつた。
「完全にな。互角の腕で作ればどんな料理でもそのレベルは同じになるんだ」
「どんな料理でも」
「互角に」
「互角に」
「そうだ」
先生の声が一段と強いものになつた。
「そういうことだ。だから大阪風も広島風も同じ美味さになつたんだ」
「腕やつたんか」
「それがお好み焼きを」
「そういうことだ。わかつたな」
あらためて一人に対して告げた。
「そちらがいいといふんぢゃないんだ。同じなんだ」
「お好み焼きはどつちでも」
「同じなんぢゃな」
「そうだ。わかつたな」

先生の言葉がここでまた強くなつた。

「どちらがいいというものじゃないんだ。大切なのは腕だ」

「そうか、わかつたで」

「腕じやつたら」

先生の言葉を聞いて同時に顔を上げる一人だつた。そして見合つたうえで。

「菜月」

「桜」

まず互いの名を呼び合つのだつた。雰囲気が明らかに違つてきていた。何と実にいいタイミングで一人の後ろには鮮やかなまでに赤い大きな夕陽が出て来ていた。

「おつ、このシチュエーションは」

「まさか」

皆その夕陽を見て笑顔になる。いい雰囲気だと思ったのだ。

それは先生も同じだつた。ずっと横にいる校長先生に對して話した。

「これで一件落着ですな」

一人を見ながら会心の笑みでの言葉であつた。

「これで」

「そうですね」

そしてそれは校長先生も同じであつた。誰もがこれで終わりだと思つた。

「これで。この騒ぎも」

「はい。後は」

感動の和解だと。誰もが思つた。当然皆も先生達もだ。ところがそれで無事終わるかというと。そうは問屋が卸さないのであつた。一人は顔を見合わせあつて。手を差し出すかわりにそれをお好み焼きのへラを持ち出してお互に言い合つのであつた。

「こうなつたらな！」

「腕じやー！」

相変わらず激しい敵意を見せながら叫び合つ。制服のミニスカートの上に付けているエプロンはどちらもソースで汚れきつているがそれにも構わぬだ。

「腕磨いて抜かしたるからな！」

「それはこっちの台詞じゃ！」

「今日は腕であつた。

「腕は幾らでも磨ける。うちは天才やで」「面白いこと言うのう。天才はうちじや」またしても睨み合つていた。

「この天才に勝てる筈がないやろ！」

「天才はうちじや！」

「おどりには絶対勝つたる！」

「われ泣かしたるけえのお！」

「駄目だこりや」

そんな二人を見た生徒達の言葉であった。

「こいつ等はもうどうしようもねえな」

「どうあつても喧嘩かよ」

「殆どあれだな。軍鷄」

また随分とえげつない例えであつた。

「それか闘犬じやねえか。もうどうしようもねえよ」

「そうだな。もうこれはな」

「お手上げだよ」

いづつ言って呆れ返る旨であつた。そして先生はといつと。もうその手を点にさせて肩の力が思いきり抜けて呆然としているのであつた。

第七章

「何でだ？」
次にこいつも言った。

「何でこうなるんだ？折角終わると思ったのに」

「ははは、まあそつなつてもいいではありますか」

「校長」

しかし校長先生は明るく笑いながら先生に対して述べるのだった。

「これもまた」

「いいのですか？」

「切磋琢磨です」

儒学の言葉だ。互いに磨き合つといふことだ。若い頃はそうせよと重ね重ね言うのはかなり年輩の教育者である。この校長はそこまで歳ではないがそれでも言うのだった。

「ですからこれもまたよしです」

「いいのですか」

「暴力はないではないですか」

「それは確かに」

その通りだった。一人はいがみ合いや競争をしてもそれでもそういった喧嘩はしないのだった。あくまで互いにライバル意識を燃やし競り合っているだけだ。確かに問題のある行動や発言ばかりだがそれでもあくまで競り合っている。それだけは間違いなかつた。

「ですから。それで」

「いいのですか」

「そういうことです。それに」

「それに？」

「あの二人が競争すればいいことがありますよ」

校長先生が今度言うのはいつもであった。

「それも実にいいことが」

「そうなのでですか？」

「二人はお好み焼きで競争していますね」

「ええ、まあ」

その通りである。どうして一人がここまでいがみ合つかというとやはりそれである。とにかくお好み焼きで争っているのもまた全くぶれなかつた。

「では互いにそれを競い合えば」

「それぞれのお好み焼きの味がよくなつていきますか」

「そういうことです。ですから」

「まあ過剰にならなければいいですか」

「多少過剰であつても暴力沙汰にさえならなければ」

お好み焼きが好物の校長先生は随分と規制を緩和している。この辺りは個人的な舌の好みもそれなり以上に関係しているのであつた。

「それで構いません」

「わかりました。それでは」

「見守りましょう」

今度は教育者としての顔と言葉だつた。完全に。

「温かく」

「はい、 そうします」

「絶対に負けへんからな！」

「勝つのはうちじや！」

先生も校長先生も皆も見守る中で桜と菜月は相変わらず互いに腕をまくりいがみ合つていた。二人のお好み焼き対決はまだまだこれからなのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418f/>

お好み焼き

2010年10月8日15時54分発行